

○新品種トゲナシアレチウリについて (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: A spineless form of *Sicyos angulatus* L. in Central Honshu, Japan

周知のように北米合衆国東部地方を原産とし、ヨーロッパ東部地域にも帰化しているアレチウリは、第2次大戦後に我国へ侵入を開始した(植研 28: 372, 1953)。そして現在、主に各地の湿気ある土地、特に向陽の河岸の土手、河川敷などを中心に大群生し、所によってはオオブタクサの随伴種となり、完全な定着種となっている。本種には、米名 Bur Cucumber が示すように、果実の表面に白色絹糸状の長軟毛と、長い黄色の鋭刺とが文字通り密生しており、その旺盛な繁殖ぶりとともに、いわゆる強害草の一つとして一般に嫌われている実状にある。ところで最近、三重県教育事務所の太田久次所長は、Fig. 1 のような果実に特徴ある鋭い刺を全く欠如し、絹糸状の毛のみを有する一形を見出された。これは誤って素手でつかんだり、素足で踏みつけても少しも疼痛を与えず、これに悩まされた経験のある者にとっては、まことに奇異な感を抱かせるものである。

アレチウリが我国へ帰化して既に 30 年近くを経過しているが、このような無刺のものの存在については知られていないので、これをトゲナシアレチウリと新称し、記録しておくこととしたい。恐らく各地に存在するアレチウリを精査してみたならば、このようなものの混在が見出される可能性がある。

因みに太田氏によれば、このトゲナシアレチウリに最初に気付いたのは、1977 年 10 月 5 日のことで、場所は四日市市内の三滝川の流域(堤防)であった由。昨年も同地に大群落をなして生育しており、この中には常品の有刺のものも混じってはいるが、無刺品も数多く見出されるとのことである。

なお本品種の epithet は、長年にわたり三重県下の帰化植物フロラの解明と記録に多大の貢献をされ、この興味ある品種の発見者でもある太田久次氏を記念することにした。

終りに、北米における本種の実状について、種々御教示いただいたニューヨーク市立大学教授兼ニューヨーク植物園の Senior Curator である小山鐵夫博士に



Fig. 1. *Sicyos angulatus* L. f. *ohtanus* Asai with spineless fruits (Photo by the courtesy of Mr. H. Ohta, Oct. 8, 1978).

深謝する次第である。

*Sicyos angulatus* Linnaeus, a native of North America, was introduced to Japan about thirty years ago as a noxious naturalized element. At present, this troublesome weed has generally well-established in sunny moist places along the river banks. Recently, plants with spineless fruits have been found among the populations of normal forms in Mie Prefecture, Central Honshu, in 1977 by Mr. H. Ohta.

*Sicyos angulatus* Linnaeus, Sp. Pl. 1013 (1753).

forma *ohtanus* Asai, f. nova.

Fructus espinosus, cetero ut forma typico.

Nom. Jap. Togenashi-arechiuri (nov.).

Hab. On sunny moist sites along river banks of Mitakigawa, Yokkaichi-city, Mie Prefecture, Central Honshu (H. Ohta, Oct. 8, 1978—Typus in TI).

(東京歯科大学)

□木下奎太郎：百花譜 上下，872+5 pp. 1979，Ⅲ．岩波書店，東京．¥58,000．著者は太田正雄医学博士で，同博士が昭和18年3月から終戦の直前，すなわち20年7月までの間に，日記のようにして描かれた植物画872枚の丁寧な複製版である。抄録者はたまたまその植物の同定をたのまれたが，じつに潑刺と，しかも要点をつかんでスケッチされているのにしばしば打たれた。大体東京，伊東，軽井沢，それに一回中国へ渡っている。あのはげしい戦争のさ中にこのような見事な図が日々描かれて行ったということは，日本人の性質のよい一面であると考えたいのである。(前川文夫)

□石戸 忠：新しい植物検索法，合弁花類篇 120 pp. 1979．ニューサイエンス社，東京．¥750．1977年に出版された離弁花類篇の続篇で，5～49頁が検索表，50～120頁が用語解説となっている。前篇にくらべて記号の使用をひかえて言葉による表現を多くとり入れたことと，検索論理がよりスッキリしてきたことによって，使い易さの点で大幅な進歩がみられる。この種の検索法の開発は今後次第に必要性が高まるものと考えるので，更に便利な続篇を期待したい。草本篇であることを表示すること，検索記号の説明を巻頭にまとめてつけることを希望する。(金井弘夫)